

魂のゆりかご

田中阿里子



人文書院

田中阿里子

魂のゆり

人文書院

著者略歴

田中阿里子（たなか・ありこ）

1921年生れ。1943年日本電池社員としてジャワに赴任し、三年後に帰還す。退社後放送作家を経て小説に志す。1960年第三回婦人公論女流新人賞を受賞。著書に『闇の中の対話』『終らない喜劇』『秋艶記』『猪名の笹原かぜ吹けば』（講談社）などがある。

魂のゆりかご

一九八六年六月二〇日初版第一刷印刷
一九八六年六月三〇日初版第一刷発行

著者 田中阿里子

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺高倉西

電話・〇七五・三五一一・三三九一

振替・京都〇一一〇三

印刷 株式会社文功社

製本 坂井製本所

©Ariko Tanaka. Printed in Japan, 1986.

落丁、乱丁本はお取替え致します

目次

鱻		5
火焰樹		53
お伽話		111
鳥園		151
魂のゆりかご		209
あとがき		259

魂のゆりかご

田中阿里子短編集

鰻ふか

輸送船の中にいるのが自分の今までに見知らぬ男たちばかりだということ、植原はひどく充実した気もちをおぼえた。彼はこのジャワ島からの民間人引揚船のために配置された、たったひとりの軍医だったのだ。午前十時に東部ジャワのP港を出てから、彼はずっと前甲板のボートの蔭にこしかけて海風に吹かれていた。太陽はすでに真上にあり、舷側から後甲板にかけて張りめぐらされた天幕の上にもものすごいエネルギーを反射させていた。海は真青——というより凝縮されてコバルト色になった油の層といったもので、その上を三百トンばかりの貨物船が滑っていた。遠い海面には、チカチカと鋭い鏡の破片がとびちっていて、眼が痛くなるほどに神経を刺戟した。

船艙の中は蚕棚に仕切られてようやく一人の男が坐れるだけの余地はつくってあったが、暑さと汚れとでもじっとしておれる場所ではなかった。これがつい半年前までは、石炭を運んで南支那海のあたりをうろついた船だった。牛や馬のように、武装した兵を積込んで走ったこともあるが、今はこの老朽船が、東部ジャワ引揚邦人達の頼みの綱だった。このボロ船に鞭うってでも早くジャワ島を離れなければ、邦人達の生命が、インドネシア独立戦争にまきこまれてしまうのだ。

P港を出てからの針路はまっすぐにシンガポールに向っている。絶えまなしにゆすり上げてくるエンジンの響きが、蚕棚の壁や天井から真黒な炭粉をおとした。おそらく船艙の温度は四十度に近いだろう。滲み出た汗の塩分が結晶になって脂と共に皮膚にこびりつき、こぼれてきた炭粉とまじってザラザラした層をつくっていた。だから始めのうちはごろごろと船艙にねころがって、投げやりな時間を過ごそうと思っていた男達も、いたたまれなくなって次々に狭い鉄梯子から甲板へと上ってくるのだ。

へまるで火に炒られた鍋の底から上ってくる蟻みたいだ。だが、甲板からそれ以上は出られないぞ。外は油の海だからな。

植原は、妙に優越した気分でつぶやいた。といっても自分だって、この煮え返る熱帯の海の牢獄から出られはしないのだ。それにもかかわらず、まるで自分だけは解放を約束された人間のように、とめどなく心が拡がっていく。それもやはり、この溢れ返る男達の中に、自分を知っている人間がひとりもない事実からだろう。

甲板の上の騒ぎはまるで露天の浴場のようだ。涼しい海風をもとめてテントの下に集まってきた裸の男達が、肩と肩をぶつけ合いそうにしながらたむろしていた。男達のもとの職業はさまざまで、会社員、農業技師、工場経営者、沖仲仕、バーテンダー、写真屋、薬剤師など、限りなかったが、男達の過去がどんなに多様であろうと、彼らはいま、一律に引揚者という名前の中で、生活するより外はなかった。あり余る時間と、それにまだ充分な精力を残しながら、自分達は最低のところまで生きているのだという意識が、彼らを、やたらに喧噪にしていた。植原は男達のひとりがこちらを

向いて、手ぶりを交えながら話しているのをキャッチした。

「Mのコーヒー園ですな。三千ヘクタールにも余るコーヒー園ですよ、日本の男といえば僕ひとりでしたがね。何というか、王侯の暮しですな。別嬪の混血児^{ハーフカス}を秘書にしましてね、何ですな。ハーフカスってのはわきがの匂いに、とても魅力のあるものですな」

あの男の話しているのは多分こんな話だろう。白い歯を唇の間からむき出して喋っているのがひどく嫌味だ。そばに、黄色い顔の背の高い男がいて、鼻の先をむずがゆそうにしながら聞いているが、あの男はたぶんこう思っているのだろうか。

「白いハーフカスとは恐れ入ったものじゃないか。こいつにそんな腕があるのかね。全く混血女ときたら悍馬というより外はないからね。それにわれわれ民間人の所へどうしてそんなものが廻ってくるものか。白いのはみんな、軍の奴らが囲ってたんだ。まったく将校連ときたら、何だって無料であまい汁が吸えたんだからな」

けれどもこちらを向いている白い歯の男は意外に有能な農業技師だったかも知れないのだ。たくましい肩の筋肉、胸と腰。そして顔の真中には見事な鼻梁が自信ありげに通っており、おまけに頬ひげがのびていた。こういう男はおそらく、オランダ人から横すべりに奪いとった広い農園を営み、うまくインドネシア人達を使喚して、ヒマヤコーヒーの増産をさせたに違いないのだ。そして一方の黄色い男は、物腰からいって多分、もとは料理屋のコックだったのではなからうか。あるいは一軒の軍人用バーぐらい経営していたかも知れない。昼も夜も下士官や兵達からなけなしの給料をまき上げては、相当に貯めこんだはずだ。そういう財産はいったいどう処分しただろう。ダイヤ

か金の板か。体のどこかにかくしているかも知れない。けれども、目の前の裸のごった返しは、飼主を失った飼犬たちに似ている。一種すさまじいエネルギーを天幕の中に発散してはいるが、本来の自主性もなければ統制もなくて、いつまでも飼主を待っているあの犬達の不安さに似ている――。

ところで植原自身は今、傍観者だった。一段高い前甲板から、彼らの動きを眺めていたのだ。

その時、艦に一群の中から妙なやぎひげを生やした男が、手を宙に泳がせながら歩いてきた。男はにぎり拳をふり廻しながら、しきりと黄色い顔の男に話しかけている。ヒフンコウガイといった調子だ。

へおい、我々はいったいインドネシアに馬鹿にされてもいいのかね。俺がさっき便所へ行って手を洗う水をくれと言ったらよ。ネシアの奴、手に唾をまくまねをしやがったんだ。チェッ。俺はあいつの横づらはり倒してどぶんと海ん中へほうりこんでやりたかったよ。まったく、兄弟だなんて戦争中にあんまりあいづらを甘やかすからこんな、今になってなめやがるんだよ、あいづら……

彼はもしかすると新聞記者だったかも知れない。三流記者というものはよくあんなひげを生やしたがるものだ。それは多分従軍した時の記念をいつまでも残しておきたいためだろう。やぎひげの話なんか、周りの人間達はあまり相手にしないではないか――。

不意にその時、植原の坐っているロープの束が少しくずれてぐらりと揺れ、彼は妙な恰好にロープの真中にべたりと尻餅をついた。ああむけの首すじをいやというほど固いロープの上にうちつけ、起き上ろうとすると、手足が亀のように宙に泳いだ。それでさっきからの勝手な想像はブツリと中断され、彼は苦笑をおぼえながら、へあんな奴らの精神状態をいちいち診断してみるなんて、俺も

くだらん職業意識を働かすものだな」とつぶやいた。真実のところ、植原は彼自身が実に無能な医師であることをよく知っていたのだ。

彼は腰を上げて歩き始めた。甲板に反射する熱気の中にあまり長くいたためか、四肢に激しいけだるさを覚えていたが、船室に戻る気はなかった。左舷の方へ廻り、舷側にもたれて足もとの海をのぞいてみると、湧き起る波がしぶきとともにわずかな涼を顔に吹きつけてくる。波の動きは、船の底の方から次々に湧きおこり、そのまま白い泡の一線をひいて船尾の方へ消えていく単調なリズムのくり返したが、眺めている植原の心には、その波の動きに奪われて一緒に船尾の方へ流れていくような楽しい陶醉があった。彼はしばらく子供のようにならぬように舷側にかじりついて、その遊びに熱中していた。すると彼のしあわせな孤独を破って、「軍医さん！」という声がした。ふっと眼を上げて、まだ波の動きがくらくらする視点の中に、独りの男が笑っているのを見とめた。さっきのやぎひげの男だった。いつのまにか舷側つたいに、植原のところに歩いてきたのだ。やぎひげは近よりならなれなれしく彼の顔をのぞきこんだ。

「ちょっとすみませんが、リバーノールガーゼをもらえませんかね」

植原はしばらくためらった。それはこの突然あらわれた「民間人」にどう対そうかという迷いだ。た。が、すぐに彼の迷いとはうらはらに使いなれた軍隊語がとび出して彼自身をおどろかした。

「ふむ、貴様それを何に使うんか。この船の中では医療品は貴重なものだぞ」

やぎひげはどなられて少し肩をすくめた。そしてやや斜めに植原の顔をすくい上げてみながら、「友達が足を釘にひっかけたんですよ、大したことはないんですがね」と言った。

「何だそんなことか。じゃ、マーキロをつけてやろうか」

彼はそっけなく答えた。

「いえね。マーキロじゃ駄目なんです。実はあの、別の病気かも知れないんですよ」

「別の？」

「ええ、いや、僕じゃありませんよ」

この男は性病じゃないかとふと考えていたが、診断してみなければわからぬことだし、それも、いまは億劫だった。いずれにしろ、この船の中に性病の薬などはないのだ。

「あとでとりにこいよ」

彼は怒ったように言った。

「すみません。じゃいきますから部屋はどちらですか？」

「機関部の上だ。前甲板へ出る手前に物置場みたいな場所があるだろう」

「ああ、あの縄ばりの向う。あれが医務室ですか。しかしいいですね、軍医さんは仕事があつて」

「仕事？」

植原は苦笑を浮べた。医務室だなんて、小さなボール箱一ぱいの医療品があるだけではないか。くだらない。まるで見本のように少量ずつ入っている消化剤、整腸剤の類、解熱剤、キニーネ、消毒剤、ほうたいや体温計の類、それも旧軍隊の野戦用救急品ばかりだ。これだけの薬品をもって、この三百人の乗船者の、少くとも一週間の健康と安全を保証しようという、それが自分にあたえられた目下の仕事といえは仕事だ。船の中にみちている毒のような熱気と、悪い給食と、非衛生なす

べての条件の中で、いづどんな病気が発生するか予測はできない。もし或る種の熱帯性伝染病でも発生すれば、この船全体を亡ぼすことはわけもない話だ。だから彼の本当の仕事というのは、唯この一週間というものが、無事故で過ぎていくその僥倖をまつことのみかも知れぬ。

「これで誰かが下痢でも始めたら、打つ手はないからな、そんな奴は、海の中へほうりこむとするか」

彼は冗談のように言った。やぎひげはまたちょっと首をすくめてみせ、今度は半ズボンのポケットに手をつっこんで煙草をとり出し、ライターと一緒に差出した。

「いや、いいよ」

彼はことわった。粗悪なジャワ製の煙草だ。中身はいったい何の葉か分りはしない。パリパリに乾燥したとうもろこしの皮でまいてある。やぎひげが火をつけるとぷんと日向くさい匂いがした。

「退屈なものですな、船の中は」

やぎひげが言った。

「ああ、しかし今のうちに英気を養っておくんだな」

「まったく、日本へ帰りゃ大変ですからな」

やぎひげは、吐くあとから船尾の方へ吹きとばされていく煙草のけむりをみながら、ひくひくと小鼻を動かして言った。

「魚釣りでもできるといいんだがなァ」

「魚がいるのかね」

植原は体をのりだした。その驚いた顔を、やぎひげは鼻先で眺めまわした。

「そりゃ、いますとも。どんな海にだって魚はいますね」

もったもな話だと植原は自分の間に苦笑をおぼえたが、しかし、こんな油のようにねっとり盛
り上った海にいるのはどんな奴だろうと考えた。よっぽど精力的な、鋼のような体皮をもった魚か、
または濃い密度の潮の、どんな組織のあみ目もくぐって通れる、針のような魚かと思われた。する
とやぎひげが言った。

「軍医さんは知らんのですか。船のあとから、鰻の奴がついてくるんですよ」

「鰻？」

「ええ、五メートル位の奴だっているそうですよ」

そうだ、鰻ならいるかも知れない。この海の、厚い密度をつき破って、縦横に泳ぎまわる魚は鰻
以外にないと思える。彼は何となく興奮しながら、遠い海面に目をやった。海面は午後の燦々たる
太陽に沸き返り、とろりと地球の表面にまるく盛り上っていた。

やぎひげの眼が別のいきもののように光った。

「シンガポールにいました時、海軍民政部の筆生（女子軍属）に気の強い子がいましたね。大和撫
子っていう奴ですかな。あそこの海で泳ぎたいって言い出したんですよ。御存じでしょう？ あそ
この海には鰻の奴が、ゴマの蠅のようにいますからね、皆がやめるように言ったんですが、ひとり
で沖の方へ抜手をきっていききました」

何を話すのかと、植原は興味を感じてやぎひげの顔をのぞきこんだ。下をむいているやぎひげの

顔に、舷側の波の光りが反射してうつった。ややしんみりとやぎひげが言葉をつないだ。

「その子がずいぶん長く帰ってきませんのね、皆が心配して舁を出したんですよ。すると案のじよう、鱧にやられて、足をももの所から一本くいちぎられていました。それでもその子は、自分の力で泳いで帰ってきましたよ」

「一本の足でかい？」と植原がきいた。

「ええ、いったいどうやって泳いできたんですかね。引上げるともう死んでいましたが、執念で帰ってきたんですかな」

やぎひげは急に気弱そうに植原にむき直り、パチパチと眼をしばたいた。しかし植原はだまっ
て、その女の死のことを想像しようとしていた。女の死体は彼には非常に興味があった。彼は熱く
灼けきった砂浜の上に女の死体をおいてみた。紅く引裂かれた腿肉があった。ぬれた女の死体をと
りかこんでいる白い軍服姿の海軍の男達が並んでいた。死体をみるのにはなれているはずの自分だ
って、その風景には戸惑いを覚えるだろう。やがて誰かが死体の処置を命ぜられて、べったりとぬ
れた髪の毛に手をふれる。白い腿の、鱧にくいちぎられたあとをみる時のいいようのない吐き気。
それに比べれば戦線でさんごうに並べられた兵士達の死体は物の堆積にすぎない。

するとやぎひげが突然つきとばすように笑い出して、植原の感傷をやぶった。

「へへへ、女の執念でこわいものですね。足がなくなっちゃって泳ぐんですぜ」

「そうだな」

彼は気のなさそうな返事をしながら、不意にその鱧というものがみたい気がした。どんな奴なの